

審査の結果の要旨

氏名 深谷達史

本論文は、理解のための認知情報処理活動として、学習時間中に提示される情報から推論したり疑問を生成したりする「オンラインモニタリング」と、学習時間後に自らの理解状態を把握しようとする「オフラインモニタリング」について、それぞれの活動を高めるためにどのような介入が効果的かを検討したものである。

第Ⅰ部では、深い理解の達成のため、いかなる認知活動が求められるかを概観した。従来は、学習中の推論や疑問生成が必要であるとされてきたが、それらを促すことを試みた研究では一貫した効果が見られていなかった。そこで、第Ⅱ部では、学習中の認知活動を促す介入法を実験的に検討した。まず、研究1では、大学生に器官や器械に関する説明的文章を学習させる際、構成要素の仕組みと機能を考えさせる質問を与えることが、学習中に生成された推論や疑問の数、テスト成績などにおいて有効であるという効果が認められた。研究2では、中学生を対象とした授業において、実験群では仕組みと機能に焦点化した質問と解答を考える訓練を行った結果、一般的な質問に解答する統制群よりもテスト成績が高くなることが示された。

第Ⅲ部では、事後テスト成績の実際の値と予測値のズレを理解把握の指標として、学習後の理解把握を正確にする介入法を調べた。とくに、学習内容に対する説明活動に着目し、後での説明を予期して学習する効果と、実際に説明を産出する効果とをそれぞれ検討した。研究3では、説明予期群での理解把握が統制群より正確になるという結果は認められなかったが、研究4では、説明予期群に加え、実際に説明を産出する群を設け、5つの説明的文章に対して学習、理解度評定、事後テストを実施した。説明産出群において他2群よりも理解度評定がより正確になるという結果が得られ、自ら説明を産出することが学習内容をふり返って、自分の理解状態を把握する効果があることが示唆された。また、研究5として、説明予期が文章理解に及ぼす効果を広範囲に検討するため、先行研究をメタ分析したところ、中程度の正の効果量が認められ、説明予期が文章理解を促すことが示された。

以上を踏まえて、第Ⅳ部では、オンラインとオフラインのモニタリングについて、それぞれの認知過程に沿って本研究の介入がどのような側面に効果を及ぼしたのかを論じている。さらに、学習中・学習後の認知活動の統合を図るとともに、近年の学校教育の中で重視される説明活動の効果的な実践法について考察を加えている。

このように、本論文は、学習時間中および学習時間後の認知活動の様相と効果的介入を検討したもので、教育心理学における学術的貢献とともに、教育実践に対しても具体的な示唆をもたらす研究といえる。よって、博士（教育学）の学位にふさわしい論文であると評価された。